

# 義兄に秘密を握られた夜から、毎週金曜は廃墟で抱かれる

第1話「秘密」

2

第2話「階段」

21

第3話「ユニフォーム」

36

第4話「発覚」

53

第5話「時間制限」

69

第6話「放置」

84

第7話「嫉妬」

104

第8話「逆襲」

123

第9話「鏡」

140

第10話「告白」

154

第11話「共犯者」

177

# 第1話「秘密」

錆びたフェンスを越えた瞬間、夜風が汗ばんだ首筋を撫でた。

金曜日の夜十一時。練習は三時間前に終わっている。チームメイトは酒を飲み、繁華街へ消えていった。誘いを断るのも、もう慣れた。

廃墟となったサッカー練習場。市の予算削減で五年前に閉鎖されて以来、誰も足を踏み入れない場所だ。ナイター照明は朽ち果て、人工芝は雑草に侵食されている。観客席のベンチは錆び、ゴールネットは破れたまま風に揺れていた。

それでも、ここには他のどこにもない静寂があった。

樹はボールを足元に転がし、ゆっくりと蹴り上げた。

右ひざに鈍い痛みが走る。

歯を食いしばった。今日の練習中も、何度かこの痛みに襲われた。シュートの瞬間、切り返しの瞬間、踏み込みの瞬間。そのたびに顔色を変えないよう必死だった。

靱帯は限界だった。

最初に違和感を覚えたのは半年前。無理を重ねるうちに、違和感は痛みに変わった。チームドクターに診せれば、即座に手術を宣告されるだろう。一年のリハビリ、復帰の保証なし。

二十四歳。選手としてのピークを迎えるはずの今、すべてが終わる。

だから誰にも言えない。言うわけにはいかない。

練習後、一人でここに通い始めて三か月。誰にも見られず、自分の体と向き合える唯一の場所だった。痛みと相談しながら、どこまでなら動けるのか、どうすれば負担を減らせるのかを探る日々。

ボールを止め、夜空を見上げる。月明かりが廃墟を青白く染めていた。星が瞬いている。この静けさだけが、今の樹を支えていた。

「相変わらず、無茶してるな」

背後から声がした。

樹の全身が凍りついた。

振り返ると、観客席の影から男が歩み出てくる。長い前髪、銀縁の眼鏡、色白の肌。見間違えるはずがない。

「颯」

義兄の名前が、乾いた唇から漏れた。

「久しぶり、樹」

颯はゆっくりと近づいてくる。月明かりが眼鏡のレンズを光らせ、その表情を読み取れなくなった。

「なんでここに」

「お前を探してた」

樹の鼓動が跳ね上がる。三週間かけてお前の行動パターンを把握したんだ、と颯は淡々と言った。

「母さんから連絡があってな。最近、お前と連絡が取れないって」

「忙しいだけだ」

「嘘だな」

颯が一步踏み出した。樹は無意識に後退する。

「俺のこと、避けてるだろ」

「何言って」

「二年前から」

樹の言葉が詰まった。

二年前。颯の部屋で偶然見つけた、あの原稿。商業誌に連載中のBL漫画の下書きに、受けキャラの横に走り書きされた名前。

樹。

俺をモデルにしてたのか。そう問い詰めることもできず、樹は逃げるように颯を避け続けた。

「本題に入ろうか」

颯の声が冷たく響いた。

「ひざ、本当は限界なんだろう」

心臓が止まるかと思った。

「医師の診断書は見てない。でも、分かる」

颯が一步、また一步と距離を詰める。樹は後退できなかった。背後にはフェンスがある。

「お前の動き、変わった。二年前と比べて、明らかに右ひざをかばってる」

「そんなの」

「一週間前の試合、ボールを受けた後に一瞬顔を歪めてた。あれ、見逃す奴もいるだろうな。でも俺は十年、お前を見続けてきた」

樹は唇を噛んだ。

十年。高校二年の春、颯の父と樹の母が再婚して以来、二人は義兄弟として同じ屋根の下で暮らしてきた。互いの距離感を掴みかねたまま、樹はプロの道へ、颯は漫画家の道へ。それぞれの人生を歩んできたはずだった。

「チームに報告すれば、お前の選手生命は終わる」

颯が淡々と言った。

「報告、するのか」

「さあな」

颯の目が細められた。その奥に、何かざらついたものが見えた気がした。

「お前次第だ、樹」

颯が樹の腕を掴んだ。

「こっちに来い」

観客席の階段を引きずるように連れられ、コンクリートの壁に背中を押し付けられた。廃墟の暗がりには、ブラックライトの青白い光が漏れている。どこから持ち込んだのか、懐中電灯型のライトを颯が足元に置いていた。

「何を」

「黙ってほしいなら、分かるだろ」

颯の手が、樹の股間を鷺掴みにした。

ユニフォームの薄い布越しに、颯の指が樹のペニスの輪郭をなぞる。まだ萎えているそこを、確かめるように揉みしだいた。

「やめろ」

「嫌だと言えバ？」

颯が耳元で囁いた。熱い息が鼓膜を震わせ、樹の全身に電流が走った。

「チームドクターに匿名でメールを送る。『樹選手の右ひざを精密検査してください』って」

「っ」

「それでもいいなら、今すぐ帰れ」

樹は動けなかった。

体が強張っている。恐怖からか、それとも別の何かからか。自分でも分からなかった。

「いい子だ」

颯が微笑んだ。穏やかな笑みの奥に、飢えた獣のような光が宿っている。

「ずっと考えてた。どうすればお前に近づけるか」

股間を握る手に力が込められた。ユニフォームの薄い生地越しに、颯の体温が伝わってくる。じわりと熱を帯び始めた自分の体に、樹は愕然とした。

「脅迫なんて最低だな、我ながら」

嘲笑うような声。

「でも、お前のせいだ。逃げ続けるから」

颯が樹の手を取り、自分の股間に押し当てた。

硬い。布越しに感じるその感触に、樹の喉が詰まった。颯のペニスはすでに勃起し、スラックスを押し上げていた。

「触れ」

命令口調だった。普段の穏やかな颯からは想像もできない、有無を言わせない声。

樹の指が、無意識に動いた。

布越しに颯のペニスの輪郭をなぞる。太さ、硬さ、熱さ。想像以上の存在感に、樹の心臓が暴れ始めた。

「そう、上手いじゃないか」

颯の息が荒くなる。樹の首筋に顔を埋め、深く吸い込んだ。

「お前の匂い、ずっと嗅ぎたかった」

汗と土と、かすかに残る芝の香り。サッカー選手特有の匂いを、颯は何度も吸い込んだ。

「汗臭いって、言われるだろうな。でも俺にはたまらない」

舌が首筋を這った。汗の塩味を舐め取るように、ゆっくりと。樹の全身に鳥肌が立った。

「んっ」

声が漏れた。慌てて口を押さえたが、遅かった。

「感じてるのか」

颯が顔を上げ、樹を見つめた。月明かりに照らされたその目が、危険な光を帯びている。

「首筋が弱いのか。それとも」

颯がユニフォームの裾に手を差し入れた。冷たい指先が、汗で濡れた腹筋の上を滑っていく。

「十年、想像してきた。この肌の下筋肉、この汗の味、この体を組み敷いたときの反応」

指が上へ上へと這い上がり、胸に達した。乳首の周囲をくるりと撫でる。

「っ」

樹の体が跳ねた。

「ここか」

颯の指が乳首に触れた。軽くつまむ。

「ひっ」

自分でも驚くほど甲高い声が出た。全身に電流が走り、腰が勝手に浮き上がる。

「すごい反応だな」

颯が乳首を捻った。右も左も同時に。

「あっ、だめ、そこ、やめ」

「なんで」

「おかしく、なる」

樹の声が裏返った。乳首をいじられるだけで、股間がみるみるうちに硬くなっていく。ユニフォームが明らかにテントを張り始めていた。

「面白いな。漫画で描いたとおりだ」

「漫画、っ」

「俺の連載、読んだことあるか」

颯が乳首を引っ張りながら言った。

「受けキャラの乳首が異常に敏感な設定、誰をモデルにしたと思う」

「知るか、そんなんっ、あっ」

颯が乳首を弾いた。ぴん、と音が立つほどの強さで。樹の視界が白く染まった。

「想像で描いてた。実際はどうか、確かめたかった」

颯は樹の乳首を両手でつまみ、ぐりぐりと回し始めた。親指と人差し指で挟み、潰すように揉む。

「やあっ、颯、待って」

「待たない」

颯が乳首を吸った。右の乳首に唇を押し当て、舌先でつんつんと突きながら強く吸い上げる。



ちゅうっ、じゅるっ、と淫靡な音が響いた。

「ひいっ、だめ、そこ、気持ちいいっ」

樹の腰が浮いた。自分の体を制御できない。乳首を吸われるたびに、股間がびくびくと跳ねる。

颯が乳首から口を離し、舌を這わせた。ぐるり、と乳輪をなぞる。そして再び吸い上げる。左も同様に。交互に、何度も。

「あっあっあっ、やばい、やばいっ」

樹のユニフォームの股間が濡れ始めていた。先走り液が染み出し、布を湿らせている。

「もうこんなに出てる」

颯が樹の股間を撫でた。ぬるりとした感触が、布越しに伝わる。

「乳首だけでここまでなるなんて。お前、本当に初めてなのか」

「うるさ、い」

「処女か」

「は」

「アナルの話だ」

樹は言葉を失った。颯がさらりと言った「アナル」という単語が、脳に焼き付いて離れない。

「今日はいれない。安心しろ」

颯が樹のユニフォームを捲り上げた。鍛え上げられた腹筋と胸板がブラックライトに照らされ、青白く浮かび上がる。汗が光を反射して、全身が濡れ光っている。

「綺麗だな」

颯が呟いた。その声に、初めて本音が滲んだ気がした。

「ずっと見てた。高校の頃から、お前がサッカーしてる姿を。汗まみれで、全力で、輝いてて」

唇が胸板に押し当てられた。舌が汗を舐め取りながら、下へ下へと移動していく。

「最初は何とも思わなかった。義弟だし、男だし。でも気づいたら、お前のことしか考えられなくなってた」

颯が腹筋をなぞった。割れた筋肉の溝に舌を這わせる。樹の腹がびくりと震えた。

「漫画を描き始めたのは、お前を忘れるためだった。紙の上で欲望を消化すれば、楽になると思った」

舌がへその穴に入った。くるくると回される。

「あっ、そこ、くすぐったっ」

「逆効果だった。描けば描くほど、本物が欲しくなった」

颯が顔を上げた。眼鏡の奥の瞳が、ぎらついていた。

「お前が欲しい、樹」

手がユニフォームの腰紐を解いた。するりと布が落ち、樹の下半身が露わになる。

白いボクサーパンツ。その中身が限界まで膨らみ、布を押し上げていた。先端は完全に濡れ、透けて赤黒い亀頭の輪郭が浮かんでいる。

「すごいな」

颯が息を呑んだ。

「見るよ、ここ」

下着の先端を指さす。透明な液が滲み出し、布を湿らせている。じわじわと染みが広がり続けていた。

「止まらないのか」

「うるさい、見るな」

「無理だ」

颯が下着の上から樹のペニスを握った。布越しに形を確かめるように、ゆっくりと撫でまわす。

「太いな。漫画で描いたのより、ずっと」

「やめろ」

「なんで」

颯が樹の耳元で囁いた。

「気持ちいいだろ」

握った手を動かし始めた。布越しに、根元から先端まで、ゆっくりと扱く。

ずり、ずり、と布が擦れる音。樹の先走り液がどんどん滲み出し、下着をぐっしょりと濡らしていく。

「ふっ、あっ」

樹の声が漏れる。もう我慢できない。体が勝手に反応している。

「脱がせるぞ」

颯が下着のゴムに指をかけた。

「嫌だ」

「そうか」

颯が下着を引き下ろした。樹の意見など最初から聞く気がなかった。

解放されたペニスが跳ね上がる。限界まで充血した亀頭は赤黒く、皮が完全に剥けて鈴口がぱっくりと開いていた。根元から先端まで血管が浮き、ドクドクと脈打っている。先端から透明な液が糸を引いて垂れ、太ももに落ちていった。

「これがお前のか」

颯が魅入られたように見つめた。

「立派だな。サッカー選手らしい」

「何が」

「筋肉質で、血管が浮いてて、精力がありそうで」

颯が手を伸ばしかけて、止めた。

「まだ触らない」

代わりに、顔を近づけた。樹のペニスの先端から数センチの位置で、ふう、と息を吹きかける。

「っ！」

樹の腰が跳ねた。

「感じるのか、息だけで」

颯がもう一度息を吹きかけた。今度は根元から先端まで、ゆっくりと息を当てながら移動する。ふうう、と長い吐息が、勃起したペニス全体を撫でていく。

「やめ、て」

「何で」

「おかしく、なる」

「いいじゃないか。おかしくなれ」

颯が膝をついた。ペニスと同じ高さに顔を据え、じつくりと観察し始める。

「亀頭の形、綺麗だな。カリが張ってて」

息を吹きかける。ふっ、ふっ、と断続的に。

「先走り、すごい量だ。俺の息だけでこんなに出るのか」

確かに、樹のペニスからは絶え間なく透明な液が溢れていた。ぽたぽたと太もみを伝い、床に小さな水たまりを作っている。

「下も見せろ」

颯が樹の太もみを押し開いた。睾丸が露わになる。

「ここにも息を」

ふうう、と温かい吐息が睾丸を包んだ。

「ひっ、あっ」

樹の体がびくりと震えた。睾丸がきゅっと引き締まり、ペニスがぴくぴくと跳ねる。

「敏感だな。ここも弱点か」

颯が睾丸にも息を吹きかけ続けた。ふっ、ふっ、と断続的に。熱い吐息が柔らかい皮膚を撫でていく。

「十年、待ったんだ」

颯の声が低く響いた。

「今日くらい、焦らせてくれ」

息が太ももの内側を這った。付け根のあたりをふうっと撫でる。そこから股間に戻り、睾丸を、そしてペニスを。触れそうで触れない、もどかしい刺激が続く。

樹の全身が粟立っていた。皮膚が過敏になり、空気の流れさえ感じ取れるほどに。颯の吐息が当たるたびに、体が震え、声が漏れる。

「あっ、颯、もう、無理」

「何が無理だ」

「触って」

「なんて？」

颯が意地悪く笑った。

「聞こえなかったな。もう一度」

樹は唇を噛んだ。プライドが邪魔をする。でも体は限界だった。

「触って、ください」

「よく言えた」

颯の手が、ついに樹のペニスを握った。

「あああっ」

直接触れられた瞬間、樹は声を上げた。颯の手は冷たかった。その冷たさが、燃えるように熱い樹のペニスに沁みる。

「熱いな。燃えそうだ」

颯がゆっくりと手を動かし始めた。先走り液を絡ませながら、根元から先端まで、丁寧に扱く。

じゅぶ、じゅぶ、と淫靡な水音が響いた。樹の先走り液が颯の手を濡らし、ぬるぬると滑っていく。

「いい音だな。お前の体液で」

「言う、な」

「なんで」

颯が手の動きを速めた。じゅぽじゅぽじゅぽ、と水音が激しくなる。

「ふっ、あっ、颯、速い」

「まだまだ」

颯の親指が亀頭の先端を押した。ぐりっ、と尿道口を刺激する。

「だめ、そこ、っ」

「ここがいいのか」

親指がカリの溝をなぞった。ぐるり、と一周。裏筋に沿って、根元まで撫で下ろす。

「っ！」

樹の腰が大きく跳ねた。視界に火花が散る。

「ここか。弱点」

颯がカリの溝を集中的に責め始めた。親指の腹で、ゆっくりと、執拗に。くるくる、くるくる、と同じ場所を何度もなぞる。

「やめ、待って、それ、だめ」

「だめなところばかりだな、お前は」

手の動きは止まらない。カリの溝を親指でなぞりながら、残りの四本の指でシャフトをしっかり握り、上下に動かす。

じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ。

水音が廃墟に響き渡った。

「颯、颯っ」

「何だ」

「もう、出る」

「まだだめだ」

颯が手の動きを止めた。

「えっ」

樹は呆然とした。絶頂の直前で止められ、体が宙ぶらりんになる。

「なん、で」

「焦らしだ」

颯が微笑んだ。

「十年待ったんだ。一回で終わらせるつもりはない」

樹のペニスがびくびくと跳ねていた。達しそうで達せない、もどかしさに体が震える。

「お願い」

「なに」

「続けて」

「お願いの仕方がなってないな」

颯が樹の顎を持ち上げた。目を合わせる。

「ちゃんと言え。なにをしてほしい」

樹は颯を睨んだ。でも体は限界だった。プライドを捨てるしかない。



「手で、イかせてください」

「いい子だ」

颯が再びペニスを握った。今度は容赦なく、激しく扱き始める。

じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ。

速い。さっきまでとは比べものにならない速度で、颯の手が樹のペニスを上下する。先走り液が飛沫となって散り、ブラックライトの光に青白く照らされた。

「あっあっあっあっ」

樹の声が途切れ途切れになる。腰が勝手に動き、颯の手に擦り付けるように腰を振り始めた。

「自分から腰振ってるぞ」

「うるさい、黙れ」

「イきたいか」

「イき、たい」

「なら、イけ」

颯がカリの溝を親指で強く押した。

それが引き金だった。

「あああああっ！」

樹の全身が弓なりに反った。腰が大きく跳ね、ペニスがびくびくと痙攣する。

先端から白濁した精液が噴き出した。

一発目は勢いよく弧を描き、颯の顔に飛んだ。眼鏡のレンズを汚し、頬を伝って落ちていく。

「っ」

二発目は颯の胸元に。三発目、四発目は樹自身の腹に。ビュルッ、ビュルッ、と音を立てて噴射される精液は、止まる気配がなかった。

五発目、六発目。量は減らない。颯の手がペニスを扱き続け、その度に新しい精液が絞り出される。

「すごいな」

颯が呟いた。精液まみれの顔で、恍惚とした表情を浮かべている。

「十年待った甲斐があった」

七発目。ようやく噴射の勢いが弱まり、どろりとした精液が先端から流れ落ちた。

樹は壁にもたれかかり、荒い息を吐いていた。絶頂の余韻で体が震え、まともに立ってられない。脚に力が入らず、ずるずると座り込みそうになる。

「まだだ」

颯が樹を支えた。

「立ってる」

颯が自分の顔についた精液を指で掬い、舐めた。

「苦いな。でも、お前の味だ」

樹は呆然と見つめるしかなかった。自分の精液を美味しそうに舐める義兄の姿が、現実離れしている。

颯が残りの精液を指で集め、樹の唇に押し当てた。

「舐めろ」

樹は逆らう気力がなかった。舌を出し、自分の精液を舐め取った。苦い。塩気がある。これが自分の味なのか。

「いい子だ」

颯が樹の頬を撫でた。その手が、まだ半勃ちの樹のペニスに触れる。

「まだ元気じゃないか」

「もう、無理」

「本当か」

颯が根元から先端まで、ゆっくりと撫で上げた。

びくん、と樹の体が跳ねる。敏感になった亀頭に触れられ、新しい快感が全身を駆け抜けた。

「嘘つき」

颯が微笑んだ。その笑みは、普段の穏やかなものとは違う。飢えた獣のような、危うい輝きを帯びていた。

「今日はここまでにしてやる」

颯が手を離し、立ち上がった。

「でも、これで終わりじゃない」

「何を」

「毎週金曜の夜、ここに来い」

樹の目が見開かれた。

「来なかったら」

颯が耳元で囁いた。

「チームに報告する」

そのまま颯は身を翻し、暗がり消えていった。

残された樹は、精液まみれの体を抱きしめながら、夜空を見上げた。

ブラックライトの青白い光が、床に散った精液を不気味に浮かび上がらせている。

俺は、何に巻き込まれたんだ。

答えのない問いが、廃墟の静寂に溶けていった。

## 第2話「階段」

一週間が、永遠のように長かった。

月曜日の練習中、樹は何度も集中を欠いた。ボールを蹴る瞬間、颯の顔が浮かぶ。冷たい手に握られた感触が蘇る。耳元で囁かれた言葉が、鼓膜の奥で反響する。

毎週金曜の夜、ここに来い。

パスをミスした。監督が怪訝な顔で樹を見た。「調子悪いのか」と聞かれ、「大丈夫です」と答えた。大丈夫なわけがない。

火曜日、チームメイトに「顔色悪いぞ」と言われた。睡眠が浅いのだ。毎晩、夢を見る。廃墟のコンクリート、ブラックライトの青白い光、颯の眼鏡の奥で光る瞳。目覚めると下着が濡れていた。自分の意思とは関係なく、体が反応していた。

水曜日、右ひざが特に痛んだ。無理を重ねているせいだろう。でも休むわけにはいかない。休めば、周囲に怪しまれる。秘密がバレる。ストレッチの時間を長くとり、痛み止めを飲み、何事もないふりをして練習を続けた。

チームドクターが「最近、顔が強張っているな」と言った。「緊張してるだけです」と答えた。嘘だ。緊張じゃない。恐怖だ。そして、それだけじゃない何かだ。

木曜日の夜、樹は自分の部屋で鏡を見た。サッカー選手として鍛え上げた体。日焼けした肌、引き締まった筋肉、割れた腹筋。これが颯に見られている。颯の漫画のモデルにされている。

颯の連載漫画を、ネットで検索してみた。ペンネーム「風見鶏」。BL漫画の人気作家らしい。レビューには「受けキャラが可愛い」「体の描写がリアル」という感想が並んでいた。

その「受けキャラ」が自分だと思うと、吐き気がした。同時に、体の芯が熱くなった。

鏡の中の自分が、別人のように見えた。

そして金曜日が来た。

練習を終え、シャワーを浴び、着替える。チームメイトたちは飲みに行く約束をしていた。誘われたが、断った。用事がある、と。

嘘だ。用事なんかない。あるのは、義兄との密会だけだ。

車を運転しながら、樹は何度も引き返そうとした。このまま家に帰れば、何も起きない。颯はひざの秘密をチームに報告するだろうか。本当に？

でも、もし報告されたら。

樹は廃練習場に向かった。

フェンスを越え、観客席へ向かう。月明かりが階段を照らしている。先週と同じ光景。でも、樹の体は先週とは違う反応を示していた。

心臓が、期待するように跳ねている。

違う。これは恐怖だ。

自分に言い聞かせたが、股間がじわりと熱を持ち始めているのを感じていた。

「来たな」

階段の上から声が降ってきた。颯が腰を下ろして待っていた。眼鏡のレンズが月明かりを反射している。シャツの袖をまくり上げた腕に、銀色の腕時計が光っていた。

「遅刻だ。五分」

「渋滞してた」

「嘘が下手だな」

颯が立ち上がった。階段を一段、また一段と降りてくる。革靴の足音が、コンクリートに響いた。

「迷ったんだろ。来るか来ないか」

樹は答えなかった。凶星だった。駐車場で三十分、ハンドルを握ったまま動けなかった。エンジンをかけたまま、フロントガラスの向こうを睨んでいた。

「でも来た」

颯が樹の前に立った。身長差は数センチ。それでも颯の存在感が、樹を圧倒している。

「偉いな、樹」

頭を撫でられた。まるで犬を褒めるように。屈辱的なはずなのに、体が熱くなる自分が嫌だった。

「今日は何をする気だ」

「教育」

「は」

「先週は挨拶だった。今日から本格的に、お前の体を教育する」

颯の手が、樹の腕を掴んだ。細い指なのに、力は強い。

「ついてこい」

観客席の階段を引きずられるように上がっていく。中腹あたりで颯が足を止めた。

「ここだ」

樹は周囲を見回した。階段の途中。コンクリートの段差が続いている。何の変哲もない場所に見えた。

「何がしたいんだ」

「段差を使う」

颯が樹の肩を押した。樹は一段上に立たされた。

「動くな」

颯が一段下にひざまずいた。その姿勢だと、颯の顔がちょうど樹の股間の高さになる。

樹の喉がひくりと震えた。

颯の手がベルトに伸び、金具を外した。

かちゃり、という金属音が夜の静寂に響く。ジッパーが下ろされ、ズボンが太ももまで落とされた。

夜風が素肌を撫でる。白いボクサーパンツ一枚になった樹の股間は、すでに布を押し上げ始めていた。

「もう反応してる」

颯が呟いた。指が下着の膨らみをなぞる。

「一週間、待ち遠しかったか」

「違う」

「体は正直だな」

颯の指が、下着の上から樹のペニスの輪郭をなぞった。布越しに形を確かめるように、根元から先端まで、ゆっくりと。

「んっ」

声が漏れた。先週よりも敏感になっている。一週間、颯のことを考え続けたせいかな。それとも、この瞬間を待っていたのか。

「脱がすぞ」

下着が引き下ろされた。半勃ちのペニスが解放され、夜気に晒される。先端はまだ皮を被っていたが、根元は確実に硬くなり始めていた。



「先週より、反応が早い」

颯が樹のペニスを握った。

「っ」

冷たい。颯の手だけではない。金属の、鋭い冷たさがペニスに触れていた。

「その時計」

「ああ、これか」

颯が左手首を見せた。銀色の腕時計。金属製のバンドが、月明かりを反射して光っている。

「今日のために買った」

颯が手首を動かすと、腕時計の金属バンドが樹のペニスの根元に触れた。ひやりとした感触が、燃えるように熱い肌に沁みる。

「どうだ、この感触」

「冷た、っ」

「気持ちいいだろ」

颯が手を動かし始めた。握った指の間から、腕時計の金属部分がちらちらとペニスに触れる。温かい手のひらと、冷たい金属。交互に感じる温度差が、樹の神経を狂わせていく。

「あっ、なに、これ」

「温冷刺激っていうんだ」

颯がペニスを根元から先端まで扱きながら言った。

「熱いところに冷たいものが触れると、感覚が増幅される。逆もまた然り」

「漫画で、調べたのか」

「お前のためにな」

颯の手の動きが速くなった。じゅぷ、じゅぷ、と音が鳴り始める。樹の先走り液が滲み出し、颯の手を濡らしていく。

「もう出てきたか。早いな」

颯が手を止め、濡れた指を見つめた。透明な液が糸を引いている。

「一週間溜まっていたのか」

「うる、さい」

「抜いてないのか、この一週間」

樹は答えられなかった。

颯のことを考えると、自慰をする気になれなかった。でも体は溜まっていく。毎晩、夢の中で颯に触られ、朝には下着が濡れていた。自分の意思とは関係なく、体が颯を求めている。

「夢精でもしてたか」

凶星だった。颯は全部見透かしている。

「可愛いな、樹」

颯が顔を近づけた。樹のペニスの先端に、唇が触れる。

「っ！」

「今日は、ここを使う」

舌が亀頭を舐めた。ぺろり、と一舐め。先走り液を掬い取るように。

「待て、颯」

「何だ」

「それは」

樹の声が震えた。男に啜えられる。しかも義兄に。

「嫌か」

「当たり前だ」

「でも、体は嫌がってない」

颯がペニスを握り、上下に動かした。完全に勃起したそれは、颯の手の中でびくびくと脈打っている。先端から先走り液が溢れ、颯の指を伝って落ちていく。

「見ろ、こんなに元気だ。カチカチだぞ」

「それは、刺激されたら、誰でも」

「誰でも？」

颯の目が細くなった。

「じゃあ試すか。俺以外の奴に触らせて、同じ反応が出るか」

「そんなこと」

「冗談だ」

颯の声が低くなった。

「お前に触っていいのは、俺だけだ」

その言葉と同時に、颯の口が樹のペニスを呑み込んだ。

「あああっ」

熱い。颯の口の中が、信じられないほど熱い。舌が亀頭の裏側を舐め回し、頬の内側がカリを締め付ける。

樹は階段の手すりを掴んだ。立ってられない。ひざが震え、腰が勝手に動こうとする。

颯の頭が下にある。一段下にひざまずいた颯が、樹を見上げながらペニスを咥えている。その光景が、背徳的で、淫靡で、たまらなく興奮した。

「動くな」

颯が口を離して言った。唾液の糸が唇とペニスの間に架かる。透明な液が、糸を引きながら垂れていく。

「俺のペースでやる」

再び口が戻ってきた。今度は深く。亀頭だけでなく、シャフトの半分まで呑み込まれる。

「ふっ、あっ、颯」

颯の舌が、ペニスの裏筋を這い上がった。根元から亀頭まで、ゆっくりと。敏感な裏筋を舌尖でなぞられ、樹の背筋に電流が走る。

そして亀頭の先端に達すると、尿道口をつんつんと突く。

「だめ、そこ」

颯は答えない。代わりに、尿道口に舌尖を押し込むような動きをした。ぐりぐり、と小さな穴をほじくり返す。

「ひっ」

樹の腰が跳ねた。今までに感じたことのない刺激が、背筋を駆け上がる。

「ここも弱いのか」

颯が一瞬口を離して言った。唾液が糸を引き、顎に垂れる。

「先週は乳首とカリ。今日は尿道口が追加だな」

「メモでも取ってるのか」

「頭の中にな。お前の弱点マップを作ってる」

颯が再びペニスを咥えた。今度は、腕時計をつけた左手で睾丸を握る。

「っ！」

冷たい金属が、柔らかい睾丸に触れた。ひやりとした感触が、袋の中身を引き締める。同時に、温かい口の中でペニスが脈打つ。

「あっ、あっ、やばい」

樹の体が震え始めた。温かい口と冷たい金属。上と下で正反対の刺激を与えられ、神経が混乱している。

颯の頭が動き始めた。ゆっくりと、樹のペニスを出し入れする。

ずるっ、じゅぷっ、ずるっ、じゅぷっ。

卑猥な水音が廃墟に響いた。颯の唾液と樹の先走り液が混ざり、泡立ちながら音を立てている。

「颯、待って」

樹の手が颯の頭を掴んだ。押し離そうとしたのか、引き寄せようとしたのか、自分でも分からなかった。

「んう」

颯が喉を鳴らした。樹のペニスを咥えたまま、上目遣いで樹を見上げる。眼鏡の奥の瞳が、妖しく光っていた。

「お前、そんな顔も、できるのか」

樹の声が掠れた。普段の穏やかな颯とは別人のようだった。口の端から唾液を垂らし、頬を窄めてペニスを吸い上げる姿は、淫靡という言葉がぴったりだった。

颯が一度口を離した。唾液まみれの顔で、にやりと笑う。

「お前のためだけに見せる顔だ」

ぺろりと唇を舐め、再び啜える。今度は一気に根元まで。

「っ！」

亀頭が喉の奥に当たった。颯の喉が樹のペニスを締め付け、嚥下の動きが亀頭をマッサージする。

「深っ、颯、喉まで」

颯は答えない。ただ、頭を前後に動かし続ける。

ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ。

喉を鳴らしながら、颯は樹のペニスを喉奥まで呑み込んで吐き出すを繰り返した。深くまで入るたびに、颯の鼻が樹の恥毛に触れる。汗と、男の匂いを吸い込んでいるのだろう。

「あっ、あっ、あっ」

樹の声が途切れ途切れになった。腰が勝手に動き、颯の口に擦り付けるように腰を振り始める。

「止まれ、ない」

颯が樹の腰を掴んだ。動きを止め、ゆっくりとペニスを引き抜く。唾液の糸が、何本も架かっている。

「止めなくていい」

唾液まみれの顔で、颯が言った。眼鏡が曇り、瞳が濡れている。

「好きに動け」

「でも」

「犯せ。俺の口を」

その言葉が、樹の中の何かを壊した。

樹は颯の頭を両手で掴み、腰を突き出した。勃起したペニスが颯の口に突き入れられ、喉奥を突く。

「んぐっ」

颯が呻いた。それでも口を開け続け、樹を受け入れている。

樹は腰を振り始めた。最初はぎこちなく、やがて獣のように激しく。階段の段差を利用して、上から下へ、突き下ろすように腰を動かす。

ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ。

颯の喉が樹のペニスを締め付ける。唾液が溢れ、颯の顎を伝って胸元に落ちていく。シャツの襟が濡れている。眼鏡がずれ、涙が滲んでいた。それでも颯は口を閉じない。

「颯、颯っ」

樹は夢中だった。義兄の口を犯している。その背徳感が、快感を何倍にも増幅させている。

颯の腕時計をつけた手が、樹の睾丸を揉み始めた。冷たい金属が睾丸を転がし、付け根から会陰部を撫でる。

「やば、もう」

樹の腰の動きが乱れた。限界が近い。

颯がペニスを深く咥えたまま、腕時計の金属バンドで睾丸を挟むように握った。冷たさが、沸騰しそうな袋を包み込む。

「っ！」

それが引き金だった。

樹の全身が痙攣し、腰が大きく跳ねた。ペニスが颯の喉奥で脈打ち、精液を噴き出す。

「んぐっ、んっ、んう」

颯が喉を鳴らしながら、樹の精液を嚥下していく。ごくり、ごくり、と喉が動くたびに、樹のペニスから新しい精液が絞り出される。

「あああっ」

樹は叫んだ。颯の口の中で射精する感覚が、脳を白く染めていく。

四発、五発。射精はまだ続いている。颯は全てを飲み干そうとしているが、量が多すぎる。口の端から白い液が漏れ、顎を伝って落ちていった。ぼたぼたと、颯のシャツを汚していく。

六発目でようやく射精が収まった。樹は階段の手すりにもたれかかり、荒い息を吐いている。

颯がゆっくりとペニスを口から離した。最後の一滴を舌で舐め取り、ごくりと飲み込む。

「たくさん出たな」

颯が口元を拭いながら言った。精液と唾液が混ざった液体が、指について糸を引いている。

「一週間分か」

「お前が、溜めさせたんだろ」

「俺のせいかな」

「誰のせいでもない」

樹は目を逸らした。颯のせいだ。颯のことを考え続けた一週間のせいだ。でも、そんなことは言えない。

「もう一度」

颯が言った。

「は」

「もう一度、イけ」



颯の手が、萎えかけていた樹のペニスを握った。

「待て、今いったばかりで」

「だから何だ」

颯が手を動かし始めた。敏感になった亀頭に触れられ、樹の体がびくりと跳ねる。

「っ、だめ、敏感すぎ」

「それがいいんだ」

颯の舌が、射精直後の亀頭を舐めた。ねっとり、残った精液を舐め取るように。

「ひいっ」

樹の体が震えた。快感というより、痛みに近い刺激。でも、体は反応している。萎えかけていたペニスが、再び硬さを取り戻し始めていた。

「若いな。サッカー選手は体力があるな」

颯が満足げに言った。

「まだまだいけそうだ」

口が再びペニスを呑み込んだ。今度は最初から深く。喉奥まで一気に。

「あああっ、颯、無理、無理っ」

樹の叫びは届かなかった。颯は容赦なく頭を動かし、樹のペニスを喉で締め上げる。

ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ。

射精直後の敏感な神経が、悲鳴を上げている。快感なのか苦痛なのか分からない。でも、体は勝手に反応している。ペニスは完全に勃起し、颯の喉の中で脈打っていた。

「嫌だ、もう、出ないっ」

「出なくていい」

颯が口を離して言った。唾液と精液で顔を汚しながら、それでも笑っている。

「気持ちよければいい」

腕時計をつけた手が、樹のペニスを握った。金属の冷たさが、熱くなりすぎた肌を冷やす。そして再び口が戻り、温かさが包み込む。

冷たい、熱い、冷たい、熱い。

交互に与えられる刺激に、樹の意識が飛びそうになった。

「あっ、あっ、颯、颯っ」

颯の名前しか出てこない。他の言葉を考える余裕がない。

「そうだ、俺の名前を呼べ」

颯がペニスを扱きながら言った。

「もっと大きな声で」

「颯っ、颯っ、颯うっ」

樹は叫んだ。階段に響く自分の声が、どこか遠くに聞こえる。

「いい声だ」

颯が微笑んだ。そして、口を開けてペニスを咥え直した。今度は根元まで深く、そして速く。

ずぼずぼずぼずぼ。

連続した動きに、樹の体が弓なりに反った。手すりを握る指が白くなるほど力が入っている。二度目の絶頂が近づいてくる。

「だめ、また、イクっ」

「イけ」

「颯、颯っ、颯うっ！」

樹は再び果てた。さっきほどの量は出なかったが、体を貫く快感は変わらない。ペニスが颯の口の中で痙攣し、わずかな精液を吐き出す。

颯がペニスを口から離した。唇についた精液を舌で舐め取り、満足げな表情を浮かべる。

「二回か。良い反応だ」

樹は答える力もなかった。階段に座り込み、荒い息を吐いている。全身から力が抜け、指一本動かさない。

その時、かちゃりという音がした。

顔を上げると、颯がスマートフォンを構えていた。

「え」

「いい表情だな」

シャッター音が響いた。

「待て、何を」

「保険だ」

颯がスマートフォンの画面を樹に見せた。そこには、精液で汚れた顔の樹が映っていた。乱れた髪、潤んだ目、半開きの唇。汗で肌が光り、頬が紅潮している。一目で、何をされた後か分かる写真だった。

「消せ」

「断る」

颯がスマートフォンをポケットにしまった。

「ひざの秘密だけじゃ、お前は逃げるかもしれないからな」

「お前」

「これで、逃げられなくなっただろ」

颯が樹の顎を持ち上げた。目を合わせる。眼鏡の奥の瞳が、冷たく光っていた。

「お前は俺のものだ、樹」

颯の声が、夜の静寂に響いた。

「毎週金曜日、ここに来い。来なかったら、この写真をどうするか、分かるな」

樹は何も言えなかった。

階段の上から見下ろす颯の姿が、月明かりに照らされている。その高さが、二人の関係を象徴しているようだった。

俺は、どこまで堕ちるのだろう。

答えは、来週の金曜日まで分からなかった。

## 第3話 「ユニフォーム」

宅配便が届いたのは、火曜日の夕方だった。

差出人の欄には颯の名前。中身を開けて、樹は息を呑んだ。

自分のユニフォームだった。

背番号7。樹がプロ入り以来、ずっと背負ってきた番号。サポーターショップで売っている正規品だ。胸には『ITSUKI』のネームプリント。ファンが買うものと、まったく同じ。

袋の中にはメモが入っていた。颯の几帳面な字で、短い一文。

『金曜日、これを着て来い』

樹は紙袋を放り投げた。ソファに座り込み、天井を睨む。

従う義理なんかない。そう思った。でも、指が勝手に紙袋を拾い上げていた。ユニフォームの生地に触れる。サラサラとした感触。背番号の刺繍をなぞる。胸のエンブレムに指を当てる。

これを着て、颯の前に立つ。

想像しただけで、股間が熱くなった。

自分が嫌になった。なぜ、こんなことで興奮しているのか。颯に命じられた通りにユニフォームを着て、あの廃墟に行く。何をされるか分からない。いや、分かっている。サッカー選手としての自分を、汚される。

その想像が、どうしてもなく樹を熱くさせた。

嫌なら無視すればいい。私服で行けばいい。そう自分に言い聞かせても、水曜日の練習中、ユニフォームのことが頭から離れなかった。チームメイトと同じユニフォームを着ているのに、颯から送られてきたあのユニフォームのことばかり考えてしまう。

木曜日の夜、樹は紙袋からユニフォームを取り出した。広げて、眺めた。見慣れたデザイン。でも、意味が違う。これは颯のために着るユニフォームだ。颯に見せるために。颯に汚されるために。

拳を握りしめた。

本当に着るのか。本当に、颯の言いなりになるのか。

金曜日の朝、樹は紙袋をスポーツバッグに入れた。

どうして入れたのか、自分でも分からなかった。着ないかもしれない。ただ持っていくだけだ。そう自分に言い訳しながら、練習場に向かった。

練習後、ロッカールームで着替える時間が来た。

チームメイトたちが私服に着替える中、樹はバッグを見つめていた。中には、颯から送られてきたユニフォームがある。着るか、着ないか。選択肢は二つしかない。

指がバッグのジッパーを開けていた。

ユニフォームを取り出す。広げる。袖に腕を通す。胸に「ITSUKI」の文字が光った。

鏡を見た。いつもと同じ姿のはずだ。背番号7、胸に自分の名前。でも、違う。このユニフォームは、颯のために着ている。その事実だけで、樹の心臓は異常なほど速く打っていた。

俺は、何をしているんだ。

答えは出なかった。でも、体は動いていた。ジャケットを羽織り、ユニフォームを隠す。チームメイトに見つからないよう、駐車場に向かう。

車を運転しながら、何度も引き返そうとした。でも、ハンドルは廃練習場に向かっていた。

フェンスを越え、観客席へ向かう。

颯がいた。いつもの場所で、月明かりの中に立っている。眼鏡のレンズが光を反射し、表情が読めない。

「来たな」

颯が樹を見た。視線が、樹の体を上から下まで舐めるように動く。

「着てきたか」

「お前が言ったんだろ」

「言っただけだ。着るかどうかは、お前が決めた」

樹は言葉に詰まった。確かにそうだ。無視することもできた。私服で来ることもできた。でも、樹は颯の指示に従った。颯に言われたとおり、ユニフォームを着てきた。

「脱げ」

「は」

「上着を脱げ。ユニフォームを見せろ」

樹はジャケットを脱いだ。青いユニフォームが露わになる。背番号7。胸には『ITSUKI』のネームプリント。

「いいな」

颯が近づいてきた。指がユニフォームの生地に触れる。胸元を、腹を、脇腹をなぞっていく。

「お前がピッチで着てるのと同じユニフォーム。でも今、お前は俺の前にいる」

「だから何だ」

「サッカー選手としてのお前を、俺のものにする」

颯の手が、樹の股間を掴んだ。

ユニフォームの薄い生地越しに、颯の指が樹のペニスを握った。

まだ萎えているそこを、確かめるように揉みしだく。布越しに伝わる体温と圧力。

「まだ硬くないな」

「当たり前だ」

「でも、ここに来るまでに何度も考えただろ。俺に何をされるか」

樹は答えなかった。凶星だった。車の中で、何度も想像した。颯の手が、颯の唇が、颯の舌が、自分の体を這い回る光景を。

「黙ってるってことは、当たり前だな」

颯がユニフォームの裾を捲り上げた。樹の腹筋が露わになる。鍛え上げられた肉体。サッカー選手としての証。

「待て」

「何だ」

「ユニフォームは、脱がないのか」

「脱がさない」

颯の目が、妖しく光った。

「着たままやる。お前は最後までユニフォームを着て、俺に犯される」

その言葉が、樹の体に火をつけた。

股間がじわりと熱を持ち始める。着衣のまま犯される。サッカー選手としての自分を、汚される。背番号7を背負ったまま、義兄に弄ばれる。その背徳感が、樹の興奮を煽っていた。

「四つん這いになれ」

颯が命じた。

「ここでか」

「ここでだ」

樹は従った。コンクリートの観客席に手をつき、ひざをつく。尻を颯に向けた体勢。屈辱的だった。でも、逆らえなかった。逆らう気力が、もう残っていなかった。

颯が樹の後ろに回った。ユニフォームのショーツの腰を掴み、下ろす。